

要旨

「誰々」や「何々」のような日本語の不確定代名詞重複表現の分布について、先行研究ではこれが閉鎖引用でのみ認可されるという一般化 (Sudo 2008a) が提案されているが、本稿ではこれを拡大し、当該表現は慣習的推意(conventional implicature) を導出する syntactic object がある場合に認可されるという新しい一般化を提案する。また、Potts (2005) の多次元的意味論(multi-dimensional semantics) の枠組みを採用し、当該表現が真理条件的意味の次元のみならず、慣習的推意の次元においても一般量化子のように振る舞うと仮定することによって、当該表現の特異な統語的分布を形式意味論の観点から説明する。

1. はじめに

「誰」や「何」などの日本語の不確定代名詞(indeterminate pronoun) (Kuroda 1965) は、文内の他の要素との組み合わせによって、存在量化子 (誰か)、全称量化子 (誰も)、否定極性表現 (誰も...ない)、自由選択表現 (誰でも)、疑問詞 (誰...か) など、様々な意味機能を表出することが知られているが、「誰々」や「何々」のように、形態的に重複した形で使用することも可能である (以下、本稿ではこれらの表現を不確定代名詞重複表現(reduplicated indeterminate pronoun) と呼ぶ)。工藤 (2019) は、このような不確定代名詞重複表現には、不特定の単数の指示対象を表す(1)の単数型と、不特定の複数の指示対象を表す(2)の複数型があることを指摘している (複数型は許容しない話者もいるが、少なくとも歴史的には確立しており、関西方言などにはその用法が残っている。辞書にも複数型の意味を掲載しているものが多い)。

- (1) John は明日誰々が来ると言った。 (cf. *John は明日誰が来ると言った。)
 (2) 明日来るのは誰々ですか? (cf. 明日来るのは誰ですか?)

工藤 (2019) によると、複数型は現代語では疑問詞用法に限られており、文末に疑問詞を認可する終助詞「か」があるため、重複を解除しても文は成立する。一方、単数型は文内に不確定代名詞を認可する他の要素がなく、重複を解除すると文は非文になる。統語的にも、単数型の不確定代名詞重複表現の分布は、不確定代名詞そのものの分布とは関係がなく、かなり特殊になっている。本稿では、この単数型の不確定代名詞重複表現を取り上げ、その特異な統語的分布について形式意味論の観点から考察する (以下、単数型や複数型の言及がない場合は、すべて単数型の不確定代名詞重複表現を指すものとする)。

2. 不確定代名詞重複表現の分布について

単数型の不確定代名詞重複表現の分布について、Sudo (2008a) は(3)のような一般化を提唱している (Sudo は不確定代名詞重複表現を wh-doublets と呼んでいる)。

- (3) Wh-doublets are only licensed in closed quotations. (Sudo 2008a: 342)

閉鎖引用(closed quotation) は Recanati (2000) の用語であるが、Sudo (2008b) によると、次のように定義されている。

(4) *Closed Quotation:*

A closed quotation is used as a singular term that refers to the expression enclosed by the quotation marks, and ***is entirely ignorant of the syntactic and semantic properties of the quoted expression***. The entire sentence expresses that the quoted expression has such-and-such property or is used in such-and-such way. (Sudo 2008b: 625, bold italics mine)

すなわち、単数型の不確定代名詞重複表現は、引用節内に生起し、その引用部分が統語的にも意味的にも非引用部分と関係を持たない場合に認可されるという主張である。

この Sudo の一般化は、不確定代名詞重複表現が主節には生起せず、埋め込み節でも、直接引用の「と」がある環境でしか認可されないことを適切に捉えている。

- | | | | |
|-----|-------------------------|---------------------|-------------------|
| (5) | *Bill が何々を買った。 | [matrix] | (Sudo 2008a: 342) |
| (6) | John は誰々が明日来るとみんなに言った。 | [quoted speech] | (Sudo 2008a: 344) |
| (7) | *John は誰々が明日来ることを知っている。 | [indirect speech] | (Sudo 2008a: 344) |
| (8) | John は昨日誰々が来たかと聞いた。 | [quoted question] | (Sudo 2008a: 346) |
| (9) | *John は昨日誰々が来たか聞いた。 | [indirect question] | (Sudo 2008a: 346) |

これらの観察をもとに、Sudo は「John が『Bill が誰々を愛している』と言った」の意味を(10)、「誰々」の意味を(11)のように分析している。

- (10) 『John said “Bill loves WHO-WHO”』 =
 There is an expression X referring to a person such that [Bill loves X] was uttered by John.
 (Sudo 2008a: 350)
- (11) 『dare-dare』 = $\lambda P \in D_{\langle u, t \rangle}. \exists X: X \in D_u \ \& \ [X] \in D_e \ \& \ \text{person}'([X])=1 \ \& \ P(X)=1$
 (Sudo 2008a: 352)

要するに、「誰々」は解釈上、発話された言語表現(expression)を必要とする語彙項目であり、そのことは、(11)で「誰々」が domain に type u (=expression) の項目を取るにより示されている。

しかしながら、単数型の不確定代名詞重複表現の分布は閉鎖引用内だけに留まらない。以下の例を参照されたい。

- (12) 私の先生は、アメリカのどどこ出身なんですが、フランス語も話せます。
 (13) どどここの新聞によると、明日トランプが渋谷に来るらしい。
 (14) どどここのくそガキがうちの壁に落書きをしました。

(12)では同格の関係節(appositive relative clause)、(13)では「～によると」の補部、(14)では感情表出表現(expressive)の一部として不確定代名詞重複表現が適切に認可されている ((12)~(14)の許容度は話者によって異なる。筆者のインフォーマント調査では、関西方言話者(筆者含む)は許容する人が多いが、九州方言話者は許容しない人が多い)。これらの例では、いずれも不確定代名詞重複表現が(少なくとも統語的には)引用節以外の環境に生起しており、Sudo の分析では説明できない。

ここで(12)~(14)の例に共通しているのは、これらの環境が慣習的推意(conventional implicature (Potts 2005); 以下、CI)を導出するものであるということである(閉鎖引用については Potts (2007)、同格節については Potts (2005) や AnderBois et al. (2015)、感情表出表現については Potts (2005) や McCready (2010)を参照)。したがって、本稿では、単数型の不確定代名詞重複表現の分布について、次のような新しい一般化を提案する。

- (15) 単数型の不確定代名詞重複表現は CI を導出するような syntactic object がある環境で認可される。

CI は元々 Grice (1975) が提案した概念であるが、Potts (2005) によると、次のような特徴がある。

- (16) a. CIs are part of the conventional meaning of words.
 b. CIs are commitments, and thus give rise to entailments.
 c. These commitments are made by *the speaker of the utterance* 'by virtue of the meaning of' the words he chooses.
 d. CIs are logically and compositionally independent of what is '*said* (in the favored sense)', i.e. independent of the at-issue entailments.

(Potts 2005: 11)

例えば、日本語の尊敬語「いらっしゃる」は、「来る」という真理条件的意味(at-issue meaning)に加えて、「話者が主語で表される対象を尊敬している」という CI を導出する。

- (17) 先生がいらっしゃった。 (McCready 2010: 17)
 At-issue: The teacher came.
 CI: The speaker honors the teacher.

一般に、真理条件的意味と CI は、CI が negation や modality の作用域に入らないという性質を持つことにより区別される (cf. Karttunen and Peters 1979)。

- (18) A: 先生がいらっしゃった。
 B: それは嘘だ。
 =先生は来ていない。
 ≠A は先生を尊敬していない。
- (19) A: 先生がいらっしゃったらしい。
 =先生が来たらしい。
 ≠A は先生を尊敬しているらしい。

このテストを不確定代名詞重複表現が認可される環境に適用すると、いずれの場合も不確定代名詞重複表現が認可される環境から何らかの CI が導出されていることがわかる。

- (20) 同格節
 A: 私の先生は、アメリカのどどこ出身なんです、フランス語も話せます。
 B: それは嘘だ。
 =A の先生はフランス語が話せない。
 ≠A の先生はアメリカ出身ではない。
- (21) 「~によると」の補部
 A: どどここの新聞によると、明日トランプが渋谷に来るらしい。
 =明日トランプが渋谷に来るらしい。
 ≠明日トランプが渋谷に来るという情報はどこかの新聞によるらしい。
- (22) 感情表出表現
 A: どどここのくそガキがうちの壁に落書きをしました。
 B: それは嘘だ。
 =その子どもは壁に落書きをしていない。
 ≠A はその子どもを悪く思っていない。
- (23) 閉鎖引用
 A: John は (流暢な日本語で)「さよなら」と言ったらしい。
 =John は (流暢な日本語で)「さよなら」という言葉を発したらしい。
 ≠John は (流暢な日本語で) 別れの挨拶をしたらしい。

(23)では、直接引用の「と」がある文では、証拠性を表すモダリティ形式の「らしい」が話者の心的態度を作用域に取らないことを示している。このことは直接引用の「と」がない「John は（流暢な日本語で）さよならを言ったらしい」と比較するとより明らかであろう。

3. 不確定代名詞重複表現の意味論

1つの文が持つ真理条件的意味と CI を両方計算するためには、意味の計算がこの2つの次元に分かれて行われると考える必要がある。本稿では、Potts (2005) の多次元的意味論(multi-dimensional semantics) の枠組みに従い、この2つの意味は同じ統語構造を使って個別に計算されると仮定する。この枠組みによると、各語彙項目が持つ semantic type も at-issue の次元のものと CI の次元のもの2種類に分けられる。

- (24) a. e^a, t^a, s^a are basic at-issue types for L_{CI} .
 b. e^c, t^c, s^c are basic CI types for L_{CI} .
 c. If σ and τ are at-issue types for L_{CI} , then $\langle \sigma, \tau \rangle$ is an at-issue type for L_{CI} .
 d. If σ is an at-issue type for L_{CI} and τ is a CI type for L_{CI} , then $\langle \sigma, \tau \rangle$ is a CI type for L_{CI} .
 e. If σ and τ are at-issue types for L_{CI} , then $\langle \sigma \times \tau \rangle$ is a product type for L_{CI} , a subset of the set of at-issue types for L_{CI} .
 f. The full set of types for L_{CI} is the union of the at-issue and CI types for L_{CI} .

(Potts 2005: 55)

また、本稿では、単数型の不確定代名詞重複表現自体も次のような CI を持っているとして仮定する。

- (25) 話者が不確定代名詞重複表現で代用される対象を特定できない、特定したくない、あるいは特定する必要がないと思っている。

このことは以下のような不確定代名詞重複表現の使用例が極めて自然であることから確認できる（いずれもインターネットで見つけた例を参考に筆者が作例したもの）。

- (26) a. 湖には毎日遊覧船が出ていたが、それにも乗りたくなかった。名前は知らないが、どうせ、何々の岩とか、何々の松とか、何々の浦とか、何々の島とか、そんなものにきまっている。
 b. トラブルを避けるためにも、私なんか幹事やる時は部長と課長とあと誰々が来るって最初に言っちゃってから募集しますけどね。
 c. 第4文型は「誰々に何々をVする」というパターンです。

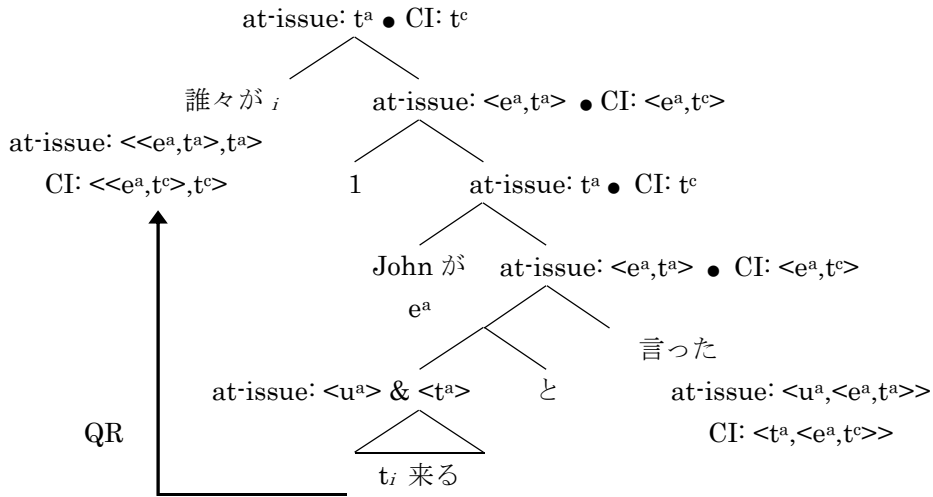
このように、不確定代名詞重複表現は、話者がその指示対象となる人や物の名前を知らない場合、たくさんあって一つ一つ挙げたくない場合、あるいはメタ言語的に特定する必要がない場合に自然に用いられる。

これらを踏まえ、本稿では、単数型の不確定代名詞重複表現の意味を次のように規定する。

- (27) 『reduplicated indeterminate pronouns (as modifiers)』 (e.g. 誰々の) =
 At-issue meaning: $\lambda P \langle e^a, t^a \rangle. \lambda Q \langle e^a, t^a \rangle. \exists ! x. P(x)=1 \& Q(x)=1$
 CI meaning: $\lambda P \langle e^a, t^c \rangle. \exists ! x. P(x)=1 \& x$ is not named (for the speaker's sake)
- (28) 『reduplicated indeterminate pronouns (as arguments)』 (e.g. 誰々が) =
 At-issue meaning: $\lambda P \langle e^a, t^a \rangle. \exists ! x. P(x)=1$
 CI meaning: $\lambda P \langle e^a, t^c \rangle. \exists ! x. P(x)=1 \& x$ is not named (for the speaker's sake)

不確定代名詞重複表現の真理条件的意味は some(one)のような一般量化子と同じであると考えておく（ただ

(34)



Potts (2007) に倣い、(34)では、直接引用の「と」によって導かれる節が *at-issue* の次元で2つの semantic type (type u と type t) を持つと仮定している。さらに、これらを項として選択する動詞「言う」には、*at-issue* と CI の2つの次元でそれぞれ意味計算が必要であると仮定する。すなわち、「言う」は、*at-issue* の次元では言語表現(=type u) を input とする発話関係を構築し、CI の次元では発話された内容の命題(=type t) によって表される話者の心的態度を表す。通常の閉鎖引用を含む文(例: John は「Mary が来た」と言った)であれば、この「言う」が引用節と発話者を項に取り、意味の計算が終了する。しかしながら、「John が『誰々が来る』と言った」で、閉鎖引用内に生じた不確定代名詞重複表現は項の位置に $\langle e^a, t^c \rangle$ のタイプを持つ syntactic object を必要とするので、(34)で閉鎖引用内にある「誰々」が適切に認可されるためには、これが主節主語を超えて上昇すると分析する必要がある。通常、節を超えての数量詞の上昇は起こらないと考えられているが、Sudo (2008a, 2008b) は閉鎖引用内の不確定代名詞重複表現と主節主語との間に作用域の相互作用が見られると指摘している。

(35) 3分の2の人が誰々が勝つと予想した。 (3分の2 > 誰々, 誰々 > 3分の2)

(i) 3分の2 > 誰々

Two thirds of the people predicted that someone will win but the person predicted could differ among them.

(ii) 誰々 > 3分の2

Two thirds of the people predicted the same person will win and the rest of the people predicted differently or did not predict anything.

(35)では、(i)に示す主節主語の作用域が広い読みも、(ii)に示す「誰々」の作用域が広い読みもどちらも可能である。したがって、本稿でも、この手の数量詞の上昇が何らかの理由により可能になっていると仮定する。さらに、Heim and Kratzer (1998) に従い、上昇した数量詞のインデックスは、主節の IP の位置で λ 抽象化 (λ -abstraction) されると仮定すると、「誰々」の CI 次元における input は $\langle e^a, t^c \rangle$ となるので、当該表現は適切に認可されることになる。

4. まとめと今後の課題

以上、本稿は、単数型の不確定代名詞重複表現の分布について、従来の「閉鎖引用でのみ認可される」という一般化を拡大し、当該表現は「CI を導出する syntactic object がある環境で認可される」という新しい一般化を提示した。さらに、Potts の多次元的意思論の枠組みを採用し、当該表現が CI の次元でも一般量子のように振る舞うと仮定することで、この一般化を形式意味論の観点から説明することを試みた。紙幅の

都合上、詳細に議論できていないが、不確定代名詞重複表現が「～によると」の補部に生じた場合や同格の関係節内に生じた場合も同様のメカニズムによってその認可過程を記述することは可能であると思われる（「～によると」は、(21)のテストから、その情報源を CI の次元で解釈すると考えられるし、同格の関係節は補文標識が何らかの CI を導出すると考えられる）。

しかしながら、本稿で提示した一般化は、不確定代名詞重複表現の認可に関わる必要条件であって十分条件ではない。つまり、不確定代名詞重複表現は文内に CI を導出する要素があれば必ず認可されるわけではなく、不確定代名詞重複表現とその要素とが関数適用により適切に意味計算されることに加えて、不確定代名詞重複表現そのものの認可に関わる語用論的な要件（すなわち、(25)のような文脈）を満たすことも必要である。さらに、(36)のように、文内に CI を導出する syntactic object が明確に存在しないように思われる場合でも、不確定代名詞重複表現が生起できる例もある。

(36) あの人は典型的な関西のどこどこ出身のしゃべり方をしている。

あるインフォーマントによると、このような例は、話者が相手に対して皮肉を込めている場合に容認されるのであった。その意味では文内のどこかに CI を導出する syntactic object が隠されているのかもしれないが、この文に使われている語彙や構文の標準的な意味からはそれを読み取ることは難しい。このように、不確定代名詞重複表現の認可条件に関してはまだまだ不明な点も多い。

これらの問題点についての考察は今後の課題としたい。

参考文献

- AnderBois, Scott, Adrian Brasoveanu and Robert Henderson (2015) At-issue proposals and appositive impositions in discourse. *Journal of Semantics* 32: 93-138.
- Heim, Irene and Angelika Kratzer (1998) *Semantics in generative grammar*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Karttunen, Lauri and Stanley Peters (1979) Conventional implicature. In: Choon-kyu Oh and David A. Dinnen (eds.) *Syntax and semantics, xi: Presupposition*, 1-52. New York: Academic Press.
- 工藤和也 (2019) 「日本語不確定代名詞重複表現の語彙化について」 関西言語学会第 44 回大会口頭発表ハンドアウト。
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- McCready, Elin (2010) Varieties of conventional implicature. *Semantics and Pragmatics* 3(8): 1-57.
- Potts, Christopher (2005) *The logic of conventional implicatures*. Oxford: Oxford University Press.
- Potts, Christopher (2007) The dimensions of quotation. In: Chris Barker and Pauline I. Jacobson (eds.) *Direct compositionality*, 405-431. Oxford: Oxford University Press.
- Recanati, François (2000) *Oratio obliqua, oratio recta*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Sudo, Yasutada (2008a) Japanese wh-doublets and metalinguistic variables. *Toronto Working Papers in Linguistics* 28: 341-356.
- Sudo, Yasutada (2008b) Quantification into quotations: Evidence from Japanese wh-doublets. In: Atle Grønn (ed.) *Proceedings of SuB 12*: 613-627.

※本研究は JSPS 科研費 (JP18K12386) の助成を受けたものである。